

University Academic Repository

「戦争花嫁」と日系コミュニティ(II):
ステレオタイプに基づく排斥から受容へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): Pacific Citizen 作成者: 安富, 成良, ヤストミ, シゲヨシ, Yasutomi, Shigeyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/36

「戦争花嫁」と日系コミュニティ（Ⅱ）

～ステレオタイプに基づく排斥から受容へ～

安 富 成 良

〈要 約〉

「日本で作られた『戦争花嫁』のステレオタイプがアメリカでも踏襲され、日系コミュニティにおいて差別、偏見が増幅された」とする本論での仮説を実証するため、前稿では駐留軍兵士を慰安する目的で設立された特殊慰安施設協会（RAA）やRAA廃止後の街娼などといった性を巡る状況や戦後日本の混乱期の社会状況を伝える日本の新聞、雑誌の報道を中心に検証した。

本稿では前稿で示したこうした日本の状況や進駐軍兵士と日本女性の性を巡る報道が日系社会における「戦争花嫁」のステレオタイプ形成に及ぼした軌跡を探る。また「戦争花嫁」と係わり合いの多かった日系コミュニティについて、その特質のうち日本社会との類似性と日系コミュニティのもつ排他性を中心に「戦争花嫁」との関連の中で論考した。日本占領期に1,300人もの日系二世兵士が日本人女性と結婚し、1952年以降も二世と結婚する日本女性も多かった。また日系人以外の兵士と結婚した日本女性の場合でも、その居住地域が日系コミュニティに隣接していることが多く、「戦争花嫁」研究にとって日系コミュニティとの問題を考察することは不可欠である。

尚、次稿において「日系コミュニティにとっての『戦争花嫁』」について論じ、現在抱える「戦争花嫁」と日系コミュニティの両者に関わる問題、及び今、日系コミュニティに求められるものについて問題提示を行う。

〈キーワード〉

戦争花嫁、国際結婚、日系国際結婚親睦会、『羅府新報』、日系アメリカ人市民協会（JACL）、*Pacific Citizen*、日系コミュニティ

目 次

(前稿)

I. はじめに

II. 戦後の占領期の進駐軍兵士を巡っての社会状況

1. 連合軍の進駐にあたって

2. 特殊慰安施設協会(RAA)設立と公娼廃止後の「性」を巡る社会状況

III. 進駐軍兵士との国際結婚を巡っての日米の反応

1. 進駐軍兵士との結婚に関連した日本の新聞・雑誌の論調

(本稿)

2. 進駐軍兵士との結婚に関連した日系社会の新聞の論調

IV. 日系コミュニティを巡って

1. 日系コミュニティと「戦争花嫁」

(1) 日系コミュニティの特質～類似性と排他性を中心に～

a. 日本社会との類似性

b. 日系コミュニティの持つ排他性

(2) 日系コミュニティの特質と「戦争花嫁」

a. 類似性と「戦争花嫁」

b. 排他性と「戦争花嫁」

(次稿)

2. 日系コミュニティにとっての「戦争花嫁」

(1) 1950年代の日系コミュニティと「戦争花嫁」

a. 1950年代の日系コミュニティ

b. ハワイの日系コミュニティでの調査事例

(2) 「戦争花嫁」の受け入れ

a. ステレオタイプを巡って～日系人の立場から～

b. 全米日系人博物館と「戦争花嫁」

V. おわりに

受容の時代へ～今、求められているもの～

Ⅲ. 進駐軍兵士との国際結婚を巡っての日米の反応

2. 進駐軍兵士との結婚に関連した日系社会の新聞の論調

アメリカの日系コミュニティのマスコミが終戦直後の「戦争花嫁」を生み出す背景となる日本の社会状況や駐留軍兵士・軍属と日本女性との交際問題、とりわけ日系二世との結婚関連の問題などをいかに報道したのかということや、1947年7月の公法213（別名、日本人戦争花嫁法Japanese Brides Act）制定前後において日系アメリカ人市民協会（JACL）が「戦争花嫁」問題をいかに捉えていたのかを認識することは、その後の日系コミュニティにおける「戦争花嫁」の問題を理解する上で極めて重要である。それは終戦後に報道された記事が日系コミュニティ内の世論の形成や日系人の抱く「戦争花嫁」像を形成してゆくのに大きな影響を与えたと考えるからである。

そこでここではこうした点に関するロサンゼルスの日系紙『羅府新報』とJACLの機関紙、*Pacific Citizen*（以後 PCと略）の両紙で終戦後の1年間に掲載された記事を中心に検証し、日系コミュニティにおける「戦争花嫁」問題の原点を探ることとする。実際1946年8月以降、両紙によって報道された記事や、その論調を1959年まで追っていても、こうした問題に関しては大きな変化は見られなかった。「戦争花嫁」像を新たに作り出すような記事以外の国際結婚に関するニュースや国際結婚による日本人の入国に関する重要なニュース報道としては、PCにおいて「日本人戦争花嫁法」制定に向けてのJACLの運動とその成果を知らせる記事、公法では救えない日本人女性などの入国を可能にする為の私法に関する記事、そして私法が連邦議会を通過して何人、誰が入国を許可されたか、といった記事が目につく程度である。ここではステレオタイプ形成に関する記事を中心に検証する。

『羅府新報』は第二次世界大戦中は休刊となり、1946年1月1日に再発刊された。そこでまず初めに1945年8月以降PCで報道された記事の幾つかを検証してみる。戦後日本の混乱した社会状況と二世兵士に関連したレポート記事に関しては「ヨコハマ便り：日本にいる二世兵士の印象記」（英字面）（9/15/1945）が最初の記事である。その他で目につく記事として、1946年1月5日の論説のアメリカ占領政策において二世が日本民主化の手助けとなり大いに貢献している、といった記事や、「日本の人々、二世兵士に親近感を持って対応」（1946/1/12）と題し、日本人は二世をアメリカ人と見なし接している、といった論調の記事がある。こうした記事はアメリカの日系コミュニティや二世たちを勇気づけるとともに、その後におこる二世兵士と日本女性の交際、結婚といった問題に、「アメリカ人としての二世兵士と日本女性が交際している」というメッセージを日系コミュニティに結果的に送ることとなった。

一方1946年1月1日に復版した『羅府新報』で目につく記事として、「親しく見聞きせる、日本の近況を語る」と題し「東京の光景、学校と娯楽場、服装と食料、交通機関の混雑、秩序維持の役」などといった小見出しのついた、米国陸軍少尉、久保田博氏（二世兵士）の執筆による記事がある。同新聞の邦字面は主に一世と帰米二世を対象に書かれたものであり、論調は戦前のものと変わっていない。一世にとって故国日本の惨状を知る唯一の手掛かりとなったこの邦字新聞の果たした役割は大きく、ここで報道されたことは日系コミュニティ内の世論形成に大きな影響を与えた。1月5日から3回シリーズで元朝日新聞ベルリン特派員の守山義雄氏の寄稿による「占領地の女性、近寄れぬ日本娘」と題したコラムが掲載されている。敗戦国日本とドイツの状況をレポートした連載で、特に治安、風紀といった点を中心に願望を込めた新しい女性像を書いている。「日本女性への憧れ」

「若い女の風紀問題」「新女性文化建設を」といった小見出しが連載記事に見られるが、その中で注目する箇所を下記に示すこととする。

銀座街頭、(中略) 紅い口紅の日本ムスメと手を組み肩を抱き合ひ、(進駐軍兵士は) いかにも楽しげなり、われら日本男子たるもの心中ははなはだおだやかならず、嫉妬3分に概欵7分、勿論罪はわが方の女性にあれども国民の感情として堪へがたきところなり、(中略) 進駐軍兵士に子犬のごとくじゃれまわってゐる参政権前後の年ごろの彼女たちを仔細に観察してみてもなさけないという感じはするが、別にこれは惜しいと思ふやうな大和撫子は目下のところ一人もをらない、(中略) かうして進駐軍をめぐる日本女性の風紀問題は、いはゆるアベック問題と称してゐる社会的な一つの宿題になりつつある」²⁸⁾

(かなはそのまま、旧漢字は当用漢字で使用)

既に述べてきたように『羅府新報』(特に邦字面)は当時の日本の報道と全く同じ論調で編集されており、同年1月17日の英語面には“*No GIs..., Stay Out!*”という見出しで銀座のダンスホール内で4人の日本女性が座っている写真入りの記事で、マッカーサー司令部(GHQ/SCAP)からの進駐軍兵士のダンスホール使用禁止を通達する記事を掲載している。これは前稿において論じているように、1月15日の日本政府からの公娼禁止令との関連での記事である²⁹⁾。こうした「性」を巡る問題や日本女性と進駐軍兵士との交際の問題についてはPCでは3月2日まで掲載していない。『羅府新報』では2月11日にヨーロッパからの戦争花嫁がニューヨーク港に到着した様子を写真とその紹介文をわずかに掲載しているのが関連した記事としては初めてである。その後日本の社会状況を帰米二世が伝えた「二世将校等は現下日本を何と見る、帝都進駐4ヶ月半の感想、日本を訪れて」(2/14&15/1946)や別の帰米二世の「日本近信」(2/23&25/1946)と題した寄稿記事を連載し、日本の現状を伝える一方、「自由を履き違へた『夜の女』を大検挙、警視庁18名を槍玉に」(2/23/1946)や「米兵相手の闇の女、3百名一斉検挙」と題した記事を掲載している。日本で報道された「進駐軍兵士相手の『夜の女』『闇の女』『パンパン』」という女性たちと下記に示すような「進駐軍兵士と交際する女性たち」を等式で結ぶステレオタイプ形成のもととなるような報道がこの頃から目に付くようになる。

日本女性との日本での交際問題についてはPCが1946年3月2日号で初めてふれ、「目に付き始める、日本女性とアメリカ軍兵士との結婚」(1面)という記事と、日系アメリカ人二世の退役軍人とカナダで結婚した日系カナダ人妻のアメリカ入国問題についての「日系カナダ人女性からの多くの結婚の申し出、報告される」(2面)、「日系カナダ人女性をアメリカに連れて帰る申し出、移民局に拒否される」(8面)と題した記事を同日に共に掲載している。これらの記事はアメリカ兵、特に日系二世と日本女性や日系カナダ人との交際、結婚に関する記事やこれらの女性のアメリカ入国などに関連する記事であるが、現状の移民法との関連でこうした問題を論じている。この日系カナダ人のアメリカ入国問題は敵性外国人として扱われていた日系カナダ人が米軍人と結婚してもその妻はアメリカ移住が禁止されていたことに関する報道である。『羅府新報』でも日系カナダ人妻のアメリカ入国問題について英字面で「退役軍人の妻、入国を禁じられる」(3/7/1946)という題で国際結婚関連の記事として初めて掲載している。PCはその後も日系カナダ人女性の結婚による入国問題やヨーロッパに駐留した二世兵士と現地女性との結婚と入国(ヨーロッパ系女性の入国は認められていた)については記事を掲載している。しかし米軍兵士と日本女性の結婚については、二世兵士のゴード氏と日本の有名女優の三浦光子の結婚式を伝える記事(4/13/1946及び同年4/27)までなく、そ

の後もヨーロッパ女性と結婚した二世の記事、日系カナダ人との結婚による入国問題を伝えるのみで、1947年2月8日の“Tokyo Romance…”と題した記事（UP通信社のHoberecht氏著の小説「東京ロマンス」についての記事）以外はその後長い間に渡って全く掲載されていない。

中国人博愛協会（The Chinese Benevolent Association）は連邦議会に対してアメリカ兵と結婚した中国人女性のアメリカ入国を求める運動を起こし、その結果、公法271（戦争花嫁法）が1945年12月28日に制定され、中国人妻も入国を認められるようになった。『羅府新報』は1946年3月12日に「米兵と結婚した日本娘の入米、許可を議会へ要求」と題した記事を掲載しているが、この記事はこの中国系市民団体のこうした経緯に鑑みて、JACLも上院移民委員会に対し、日本人も入国できるように要請したことを伝える記事である。また前稿において日本女性と駐留軍兵士との交際に対する連合軍総司令部（GHQ/SCAP）の反フラタニゼーション政策についてふれ、日本の新聞とアメリカの日系紙の論調にも論及した。『羅府新報』は1946年4月4日において“高度なモラル、健康な慰安”日米恋愛嚴重に取り締まる、マ総司令官の発表」と題し、文中の小見出しに「二世兵士と日本娘も厳禁」と書き、「同人種たりとも米軍人たる以上は同様の懲戒処分に附す」とした通達を紹介している³⁰⁾。また同時期に「帰国者の目に映じた日本の種々相、在米同胞に想像できますか」と題した連載コラムに帰米二世の東京特派員、角田敏夫が寄稿しているが、4回目の4月8日付けの掲載記事では「進駐軍と女の問題はひどく、街の女と車の中、街路での醜態は大変なものです」と嘆いている。この記事ではアメリカ兵相手の女性を「低級な階級の女性（それも主に女工）」とし「男女関係は今までの抑圧から開放されて、女性の性的な幸福の追求といった一つの反動的な現象が、このアメリカ兵対日本女の交歓に見られます」と角田は結んでいる。ロサンゼルス近郊に在住の日系人読者は日本のこうした社会状況に驚き、戸惑いながらも日本に駐留している自分の息子や知人は大丈夫なのか、と心配していたことは容易に推測される。

そうした折に4月10日に「病氣心配して居た息子はスター三浦光子と結婚、吉報を手にも喜ぶ合田中尉の両親」（「合田」の表記はママ、正しくは「郷田」）というビッグニュースが飛び込んできて更に読者は驚いたであろう。PCはこのニュースを4月13日に「カリフォルニアの二世兵士、日本の有名女優と結婚」と題して伝え、この中で「郷田氏は陸軍本部から特別許可をもらって結婚した」とし「彼は日系アメリカ人で初めて日本で（日本人と）結婚した人物であろう」と結んでいる。同月27日には「ロサンゼルス出身の二世、映画スターと結婚」（“L.A. Nisei Weds Film Star”）と題して写真入りで「アメリカ陸軍将校と日本女性との間の初めての結婚のうちの一つ」と紹介している。この記事ではこの結婚を第1号とは表現していないが、後に新聞報道などでは「アメリカ兵と日本女性の最初の結婚」と紹介することが多い。

このニュース報道以降、結婚に関する記事は両新聞にはない。戦後の混乱期の世相や日本女性と進駐軍兵士との交際、パンパンガール、といった「性を巡る問題」に関連した記事として『羅府新報』は6月12日の「僕達は坊やMP、米軍の情に『家なき児』朗か」といった戦災孤児の話や「デートしたいの、東京で?」（7/3英字面）と題してSCAPが日本女性とのデートの時に日本のエチケットと簡単な日本語の会話表現を小冊子に纏めて発行したニュースを掲載している。これに対して一世や帰米二世を対象にした邦字面では相変わらず「あくどい化粧をしたパンパンガール」の話などを掲載した7/10,11の連載コラム「ドン底日本」にあるような論調の記事が目につく。その他には連載コラム「敗戦国に帰ってくる、復員兵士（一）」（8/1）にある「3人の薄汚れた洋装の女、下駄をは

いている。ミー、ツーナイト、ゴー。オーケー、オーライ、スキーティ、とはアメリカ兵の誰はばからぬ声。」といった「米兵相手の商売女」の様態を嘆く記事や「濃厚な化粧の銀座の女性」(8/12)と題した記事の中で「どぎついメーキャップ、口紅なども街の女の如く濃厚。進駐軍兵士さえアッケにとられている」と一般の若い女性の様態を嘆く記事などが紙面を飾っている。これらのコラムなどに掲載された記事の多くは前述の角田敏夫によるものであるが、こうした記事を望郷の念を抱いている一世は複雑な思いで読んでいたに違いない。その後も同じような論調の記事は続くが、ここでは一部ではあるが、記事のタイトルだけを記してみよう。「娘さん達の服装」(8/20)、「転落する闇の女」(9/9)、「人妻は生活苦から闇の女へ淪落、なぜ彼女らは夜の女へ」(10/22)、「混血児を生むミス日本」(10/25-26)、「お医者者の失業3万余、看護婦は闇の女へ」(11/19)、「第2回『闇の女』全国検挙、闇の女出没絶つために」(11/23)、等がある。こうした記事が継続的に流され、その後も1ヶ月以上遅れたものではあるが日系人コミュニティの日本書店に日本から送られてくる週刊誌や大衆雑誌などに掲載された記事を目にするにつれて、日系コミュニティの多くの人は戦後の日本の世相に大きな衝撃を受け、進駐軍兵士を巡る日本のアプレ娘の様態や『羅府新報』などで報道されてきた「闇の女」、「パンパン」と呼ばれた女性と戦後の日系コミュニティで見かけるようになった「戦争花嫁」とをオーバーラップさせた。そうして「米兵と『戦争花嫁』」という組み合わせが「米兵とパンパン」という構図に組み替えられ、最終的に『戦争花嫁』＝パンパン、夜の女」というステレオタイプが日本と同じように定着していった。

「戦争花嫁」の日本での職業については前稿においてふれているが、RAAでダンサーやバーの女給(ホステス)などとして働いていた女性がいたことも事実である³¹⁾。しかし日本のマスコミ報道の影響やその論調を踏襲した日系社会の日系紙の報道などにより、日系コミュニティの一世や二世の中には「戦争花嫁は水商売、ダンサー、売春婦といった職業についていたのが圧倒的であった」という誤った考えを抱いていた人も多くいた。更に今なお、戦後の新一世の中にそのように思っている人が比較的多いことは、筆者のこれまでの新1世へのインタビューや「戦争花嫁」についてふれている書籍から窺える³²⁾。このことは、一度形成されたステレオタイプは、時間が経っても拭い去ることがいかに難しいか、ということを示している。これまで検証してきたように、日米においてマスコミや書籍などを通して形成されてきた偏見に基づいた「戦争花嫁」のステレオタイプがそのまま日系コミュニティにおいてあてはめられた。日系コミュニティ周辺に住む多くの「戦争花嫁」は同好のサークルで、宗教団体を含む各種の社会組織で、更に日常的にも日系コミュニティのスーパー、食堂、各種のお店などあらゆる場においてこれまでに一世や二世と接してきたが、そうしたこれまでの経験の中で、面と向かい合って言われたり、陰でコソコソ差別的なことを言われたり、色々な場面で差別されてきた、という話は「戦争花嫁」との間で時々耳にする。

Ⅳ. 日系コミュニティを巡って

1924年の移民法制定により帰化不能外国人と見なされた日本人のアメリカ移住の門は完全に閉ざされ、1947年の公法213(日本人戦争花嫁法)による「戦争花嫁」の入国まではアメリカには日本人の流入はなくなった。従って日系コミュニティは1924年までに入国した一世によって運営され、「コミュニティ生活、ならびに家族の生活は、伝統的な日本的なかたちをとり続けたが、(家庭内には祖

父母が不在で1世の両親のみであった為——筆者注）アメリカにおける日系人家族のあり方は日本のものと似たり寄ったりか、むしろ一層保守的であった」とキタノは指摘している³³⁾。一世の父親主導の家族関係が第二次世界大戦時の過酷な強制収容といった特殊な状況下で、「父権の失墜」「二世の自立」という結果を生み、それまで日系コミュニティの家庭で見られた家父長制が揺るぎかけた。戦後、日系人強制収容所から開放され、かつて住んでいた西海岸諸州の日系人コミュニティには戻らず、新たに中西部や東部に移り住んだ日系人もいたが、日系人の多くは再びかつて住んでいた地域に戻り、日系コミュニティの再建に力を注いだ。収容所体験を経て、一世は戦前ほどの力は失ってきたものの再びコミュニティや家庭での影響力を取り戻してきた。アメリカ社会は後述するように1940年代後半から、ソ連との冷戦の下で、マッカーシズム旋風が吹き荒れ、保守化の傾向を帯びるようになった。こうした時期に「戦争花嫁」は封建的な家父長制が残っていた日本から逃れ、アメリカに渡った。日系コミュニティから離れた土地で（主に全米各地の米軍基地周辺）暮らした「戦争花嫁」は、言語や生活習慣に戸惑いながらも次第にアメリカ社会に順応し、キタノも指摘しているように「統合され、同化し」、より「アメリカ化」する傾向も見られた³⁴⁾。しかし日系コミュニティ周辺に居住したり、日系二世と結婚した「戦争花嫁」の場合、日系コミュニティとの問題や嫁ぎ先の日系人家庭での問題に直面するようになった。その原因を探って行くと、これまでに明らかにした「戦争花嫁」へのステレオタイプが大きく影響して、日系コミュニティにおいては、「夜の商売でもやっていた得体の知れない連中」と一緒にされては困る、とか「あの連中が引き起こすトラブルで我々日系人がこれまで築いてきたものが帳消しにならないようにしてもらいたい」といった警戒感もあって、成員として受け入れられない新参者（new comer）として線を引かれて来たのである。

そこでここでは日系コミュニティ内又はその周辺に住む「戦争花嫁」が日常生活の中で見聞きしたり、生活体験してきた日系コミュニティの特質のうち、「戦争花嫁」に大きな影響を及ぼしたと考えられる、日系コミュニティの日本社会との類似性及び日系コミュニティの持つ排他性について、これまで行った2つの調査といくつかの事例をもとに検証する。特にこれらの2つの特質が日本で形成されたステレオタイプと結びつき、具体的な差別、偏見に結びついていったことについて例証したい。最後に「戦争花嫁」がアメリカに入国した1950年代はアメリカ及び日系コミュニティにとっていかなる時代であったのか、そうした時代状況が日系コミュニティにおける「戦争花嫁」にいかなる影響を与えたのか、といったことについて考察する。

1. 日系コミュニティと「戦争花嫁」

（1）日系コミュニティの特質

日本人移民はアメリカ入国以来「同化不能の外国人」とみなされた為に市民権も取得できず、ホスト社会からは一人前の成員として受け入れられなかった。職業においてもホスト社会から隔離され、多くの日本人移民が西日本の貧しい農村や漁村出身であったこともあり、アメリカにおいても農業、造園業、漁業に従事するものが多かった。都市部においても日系人は、コミュニティ内で日本人移民を顧客として営業していた小企業関連の職業に従事しなかった。言語や生活習慣の違いに対応できず、一世はホスト社会から職業のみならず日常生活や住居空間においても隔離された。このことにより日系人は日系人コミュニティに閉じこもることを余儀なくされ、自分達

のコミュニティの維持、発展に力を注いだ、と山本剛郎（1997年）は指摘している³⁵⁾。こうして生育され、時間をかけて形成されてきた日系コミュニティのいくつかの特質のうち、2つの特質について本節でとりあげてみたい。それはこれらが「戦争花嫁」の日系コミュニティにおける地位を見る際、最も重要な意味を持ったと考えられるからである。

a) 日本社会との類似性

特質の第1に挙げられることは、日系コミュニティの組織や構造に見られる日本のそれとの類似性である。キタノが「日系コミュニティの組織の根源は無論日本である」と指摘したように、初期の日本人移民は日本の文化、価値、規範を受け入れ、それを原型として日系社会の組織や社会体制を作ってきた³⁶⁾。つまり「日系社会＝日本社会」という日本社会縮図論とも言うべき考え方であるが、その根拠の一つとして、日系コミュニティの社会組織や社会構造が日本社会のそれと類似している、という点があげられる。この類似性が日系コミュニティの大きな特質となっている。明治時代の日本における家族のあり方（親孝行、年長者への敬い、男性中心主義と父権主義など）やコミュニティにおける縦の構造や連帯責任に見られる個より全体の重視などは、そのまま日系コミュニティでも受け継がれ、凝集力の強い社会構造が構築された。またナカノ（1992）も、一世が「明治時代の伝統的家族観を当然のように新天地に持ち込み」、こうした日本的価値観のうえに父親を頂点とした家族生活が営まれ、受入国の白人社会から切り離された状況の中で日本的な社会組織（宗教団体や県人会など）を構築し、相互の結束を強固にした、と論じている³⁷⁾。山本の記述を引用すればこうして日系人は「帰属的紐帯つまり地縁（県人会）、血縁に基づく信頼関係に支えられた道徳的コミュニティ」を作り上げていったのだ。日本社会との類似性は日系コミュニティの社会組織、社会構造とその機能、家族など多くの点で見られ、日系人の規範、行動、価値観などに大きな影響を与えた。ただ留意すべき点として、一方においてこうした類似性によりエスニック集団としての凝集性は維持され促進されてきたが、他方日系コミュニティはホスト社会への同化も同時に目指してきた、ということがある。この両方向のバランスの上に日系コミュニティには独自の「日系文化」が生れ、独自の「日系社会」が構築されてきたことを指摘しておきたい³⁸⁾。

b) 日系コミュニティのもつ排他性

第2の特質としてはコミュニティ構成員の持つ排他性がある。これは上述の日本社会縮図論の根拠のうちのこころの側面である。この特質は前述した日系コミュニティの原型である日本社会をモデルとした、日系コミュニティの「ウチとソト」の人間の使い分けや山本の指摘する「むらの精神や擬似血縁関係」に立脚した日系コミュニティの社会構造に起因すると思われる³⁹⁾。マツモト（1993）はカリフォルニア州の日本人入植地コーテズコロニー（1920年入植）の人が隣接するヤマトコロニー（1907年入植）の人からよそ者扱いされたり、「階級が違う、低いカーストと見なされて同じ日系人同士でありながらはっきりとした派閥を作られ」、仲間はずれにされたり、子供が学校でからかわれたりする差別行為があったことを指摘している⁴⁰⁾。もう一つの事例として日本人移民であからさまに差別されてきた集団として沖縄出身者がいる。ハワイ沖縄移民が内地出身の日本人移民から受けてきた差別と「オキナワン」としての主体性の確立について論じた新垣誠（1998）は沖縄人が「同胞人」つまり「日本人」であるはずなのにハワイの日系コミュニティの内地人から「異人

視」され、「他者」として沖縄人は扱われてきた、と鋭く指摘している。内地人から「オイ沖縄」と呼び捨てにされ、基本的には沖縄系は日系コミュニティから排除された、という二世研究者のフランクリン・オドの言葉を新垣は引用し、日系移民の排他性を指摘している⁴¹⁾。こうした日系社会の排他性は「ウチの者」「ソトの者」という日本から引き続き持ち込んできた二項対立的価値観や文化的、民族的に同質性の高い日本社会で生まれてきた異質のものへの排除の理論の表出であるように思える。

（2）日系コミュニティの特質と「戦争花嫁」

アメリカに入国した「戦争花嫁」は夫が配属された米軍基地の周辺地域に居住し、アメリカでの新しい生活をスタートさせた。夫の勤務地によって状況は異なるが、居住地域の近くに日系コミュニティがある場合、買い物、食事などといった日常生活の中で日系人と顔を合わせる機会があった。日系二世と結婚した場合は、夫自身だけではなくその義父母を始めとする家族や親戚との人間関係があり、更に日系コミュニティ内で他の日系人との接触もあった。こうした「戦争花嫁」が日常生活の中で訪れたり居住した日系コミュニティの特質については前項で提示したが、ここではそれらの特質が「戦争花嫁」の生活にどのような影響を与えたのか、といったことについて論じ、それぞれの特質について更に考察してみよう。

a) 類似性と「戦争花嫁」

日系コミュニティの第1の特質である「日本社会との社会構造などにおける類似性」は「戦争花嫁」には複雑な影響を与えた。自分が慣れ親しんだ社会構造をもち、日本語の通じるコミュニティで、同じ日本人の血を引いた夫やその家族、親戚らと日常生活を送ることは、異文化に接触する際に生じる摩擦も少なく、「戦争花嫁」に安心感を与えた。しかし反面、後述するキムラの調査にもあるように、義父母やその家族との人間関係の維持が難しく、人間関係でトラブルを引き起こすことがたびたびあったようだ⁴²⁾。義父母との嗜好の違いや育った場所や時代から来る価値観の違いがしばしば原因となり、お互いの人間関係がギクシャクしてしまうことがあったという。そのほかの原因として、義父母と自分の教育水準や育った家庭の経済力などを比較して、「戦争花嫁」が優越感を感じ、相手を見下してしまうこともあり、義父母およびその家族から反発を買い、良好な人間関係を築き上げることは難しかったのではないかとキムラは分析している。日系二世と結婚した多くの「戦争花嫁」にとってコミュニティや家族などが自分の育った日本社会のものと類似性があることが逆に義父母との人間関係の維持を難しくしたように思える。「嫁も同じ（文化的背景をもった）日本人なのだから、理解してくれるだろう」ということを期待したり、「日本人なのだから～するのは当然だ」「年長者や親の言うことには従うべきだ」とする一世の考えを押し付けようとしても、前述のような両者の生育環境などの違いから、一世の期待が裏切られたり、逆に嫁が反発するようになり、益々人間関係が悪くなったのではないだろうか。キムラが「戦争花嫁」の調査を行ったハワイの日系人の多くは、アメリカ本土の日系人に比べ、より古い日本の規範、価値観を持っていて、本土の日系人から「ブッダヘッド」（考え方が古く融通が利かない仏のような頭の固い人）とからかわれることがある⁴³⁾。このことが物語るようにハワイの日系人は本土の日系人以上に日本的で、「忠孝」や「義理」「恩」を重視する人が多いとよく言われる。戦後の日本の解放感を味わい、親が押し付ける

相手ではなく、駐留軍の日系アメリカ人兵士と結婚生活を送る為にハワイに嫁いできた「戦争花嫁」には、こうした考えは時代遅れに感じ、家父長制的な考えを押し付けられることに反発していたことを、キムラの調査は示している。

こうしたことはハワイだけに限らずアメリカ本土の二世と結婚した例からも窺える。ロサンゼルス出身の二世のゴード中尉と結婚した元松竹女優三浦光子の場合も、新聞や週刊誌の報道によると、婚家の義父母のみならず夫自身の封建性が離婚の原因となったようだ。この結婚は日本の新聞、週刊誌、それにアメリカの日系新聞の『羅府新報』やJACLの機関紙PCでも何度か報道されている。これらによると義父母は高知県出身の商人で戦前裸一貫で渡米した苦労人だった為に家庭は極めて封建的だったという⁴⁴⁾。1946年4月に二人は日本で結婚し2年半は日本で新婚生活を送った。しかし1947年に制定された公法213（日本人戦争花嫁法）が1948年12月28日に有効期限が切れるため、三浦は1948年11月に単身でアメリカに入国しロサンゼルスで義父母家族と同居しながら夫の帰国を待った。やがて封建的なゴード家の家族との人間関係に亀裂が生じるようになった。「ゴードの両親には、日劇ダンシングチームから映画女優といった彼女の生活が気に入らなかったらしい。しまいには夫との文通にさえ冷たい眼を光らすのだ」（引用はママ）と三浦とのインタビューをもとにこの記事を書いた執筆者は記している⁴⁵⁾。こうしたことが重なって三浦は婚家でのトラブルを避ける為に、入国後一ヶ月ばかりで封建的な義父母家族と別居して、単身でサンフランシスコに移り住んだ。

1950年1月28日のPCにはサンフランシスコで夫の帰国を待っていた三浦が、ハリウッドのスタジオ見学に行った時のことが書かれている。記事ではアメリカがいかにも民主的で自由に満ちた国なのか、それに比べて日本は男性のパラダイスとなっていて、女性の権利が認められていない、これからの日本は新憲法のもとで男女平等が認められ、女性の権利が認められるようになって欲しい、といった三浦のことばが掲載されている。やがてゴード中尉は大佐に昇進して帰米し、再び二人の生活がはじまった。アメリカで映画女優になることを決心した三浦が「ミッコ・ミウラ」でデビューすることになった時、義父母は嫁なら嫁らしく「ミッコ・ゴード」でなければならないと猛反発をした。夫もこういう事態に親の言いなりになるばかりで、その上、妻に対して封建的な態度をとるようになったという。

この事例が示すように、戦前の日本の家父長制が生き残っていた日系コミュニティの家族では、一世の影響力は大きく、義弟妹や二世の夫も家父長的な言動を示すことが多かった。事業家で且つ、義父の弟妹が同居しているゴード家で『羅府新報』を購読していたことは容易に想像できる。そしてその『羅府新報』を通して、日本で形成された駐留軍兵士と日本女性に関するステレオタイプがゴード家でも当然のように受け取られ、元ダンサーでその後女優になった三浦に対しては、いい印象を持っていなかった。また地方出身のゴード家の人々にとって日劇のダンサーも前稿で論じた特殊慰安施設協会（Recreation and Amusement Association、通称RAA）で働く進駐軍相手の女性も同列に並べられ、「夜の女となったダンサーくずれ」などといった『羅府新報』の記事内容が、三浦と一緒に生活をする中で甦ったのでないか。三浦は前述のPCで述べているように、日本の家父長制に反対し、女性の権利の拡大や男女平等を求めるような女性であった為に尚のこと、ゴード家の体質には合わず、家父長主義者の義父と戦後の民主主義を信じる三浦との間の確執が次第に大きくなって破局を迎えたと報道されている。

日本の家父長制に対して「戦争花嫁」がどのように感じていたのか、ということについて1999年

に筆者が行った調査では有効回答数87人（アメリカの参加者78名、オーストラリアは9名）のうち次のような結果が出た⁴⁶⁾。

Q.13：結婚前の日本の封建的な社会をどう感じていましたか？

a. 非常に嫌だった（19%） b. 嫌だった（31%） c. 特に嫌とは感じなかった（47%）

Q.15：配偶者の家事の参加について、該当するものに○をつけて下さい。

a. 全然しなかった（20%） b. 頼まれたらした（23%） c. 自分から進んでした（20%）

d. よく手伝ってくれた（12%） 無回答・その他（11%）

質問項目13から15は結婚前の日本での価値観と夫の家事参加の実態を聞いたものである。これらの質問を設定したのは「戦争花嫁」が結婚前に日本の古い価値観に対して嫌悪感を抱いており、そうしたものへの反感を抱いている時に、レディーファーストの国からの連合国兵士が目の前に現われ、物質的な豊かさや女性を大事にするような考えに基づいた言動を目の当たりにして彼らに恋をし、国際結婚をするに至った、という考えを検証する為である。今回の調査結果は、当時の日本の家父長制的封建制度が「非常に嫌だった」「嫌だった」を合計すると50%を示しており、設問作成時、筆者が予想していた数字よりも低い結果が出た。この結果については二通り考えられるのではないか。その一つは結婚当時から50年近く経過しており、当時の率直な気持ちを忘れてしまい、調査時の平均年齢の68.4歳という年齢相応に、保守的に考えるようになって、「特に嫌とは感じなかった」という項目に印をつけたことが考えられる。もう一つは、「比較的古風な価値観を持っていたが、夫への愛や精神的かつ経済的な安定を求めて結婚したのであり、日本の家父長制に対し特に嫌悪感を抱いていなかった」という理由からそのように回答した、という考え方である。筆者自身は前者の理由により、「特に嫌とは感じていなかった」という項目に印をつけた人の方が多かったのではないかと考えている。その理由として、項目15の質問に対して、夫の80%は何らかの形で家事参加をしていたことを調査結果が示しているからである。性役割意識に関してアメリカ的な考えを「戦争花嫁」自身が持っていて、「男は家事に携わらない」、「男子厨房に入るべからず」という日本的な家父長制に基づいた性役割分業の意識を結婚当時はあまり持っていなかったのではないかと、この調査から推測できる。当時の日本では若い男性が家事に参加をするということが、あまり考えにくい時代であった。そうした時代にアメリカ兵が示した言動が家父長制を是認するようなものでなかった為、結婚前の彼女たちには新鮮に映ったのだ。

b) 排他性と「戦争花嫁」

第2の特質の「日系コミュニティのもつ排他性」が「戦争花嫁」に向けられた事例は「戦争花嫁」との面談でもよくでてくる。ここでは2種類の調査結果といくつかの事例を最初に示し、そのあとに日系コミュニティの排他性について考察してみる。

1988年10月にワシントン州の州都オリンピアで「戦争花嫁渡米40周年記念大会」を開催するにあたって、事前に全米にいる770人以上の「戦争花嫁」に主催者が質問書を送った⁴⁷⁾。ここではその調査結果について記してみる。この質問書には「日系社会に望むこと」という項目があり、そこで自由回答をしてもらうようになっていたが、有効回答110人のうち20人がコメントを寄せている。そのコメントを見ると、「仲良くしてください」「仲良くしましょう」といったコメントや、「差別しない

で「偏見を捨てて下さい」というコメントが目につく。この記念大会の主催者の一人で、のちに「日系国際結婚親睦会」の会長となったスタウト・梅津和子氏がアンケート用紙の結果を纏めた『戦争花嫁渡米40周年記念』（以後、『40周年記念』と表記）の「結論・回答書を読んだ感想」の項において、『日系社会に望む』の質問に、多くの人が日系社会に対し、私も日本人です、と書いていて、差別偏見に悩まされて来た様子が表れている」と感想を書いている。その他の回答者からの感想をいくつか拾ってゆくと「一世、二世は国際結婚した者を特別な目で見ろ。悲しいです」、「もっと気持を開き、異質の者を受け入れましょう」、「一世、二世、新一世などと差別しないで。同じ日本人です」、「同じ国に暮らす同士です。差別しないで助け合って暮らしましょう」、「差別なしに日本人同士もっと大きな心で手をつないで行きたい」「戦争花嫁と呼ばれた頃はもう昔の事。（中略）日系社会も新しい時代の歩みが必要です」、「島国根性を捨てて欲しい」などといったコメントが寄せられていた。

1999年の筆者の調査では有効回答数87人（アメリカの参加者78名、オーストラリアは9名）のうち「Q.21. 日系コミュニティで嫌な経験をしたことがありますか」の問いに対して「はい」が22%、「いいえ」が57%、無回答が18%、「はい」「いいえ」の両方に印をつけたのが3%であった。「はい」と答えた人に具体的にその内容を書いてもらったところ、「1～10までほじくって聞く」「とにかく口うるさい」「新一世婦人のいいがかりと商売の邪魔をされた」「日系人は私達戦争花嫁を嫌いなので（私は）誰とも付き合わない」「日本女性による中傷（ゴシップ）に悩まされた」「戦争花嫁ということで嫌なことをされた」「話し掛けても知らん振り」「自分が戦争花嫁ではなく留学でアメリカに来てアメリカ人と結婚したということが分かったと急に親切な言葉になる。特に一世や二世」「日系社会のほうで壁を作っていると思う」などがあつた。また「Q.27. 日系社会は戦争花嫁に対して偏見があると思いますか」の問いに対しては、「ある」と答えたのが55%、「ない」が32%、「無回答、その他」が13%であった。更に「Q.28. あなたの住む国の社会は『戦争花嫁』に対して差別・偏見があるとおもいますか」の問いに対して、「ある」と答えたのが33%、「ない」と答えたのが51%、「無回答、その他」が16%であった。今回の回答者87名の中で日系二世と結婚した人が1名いたが、参考までにこの被調査者の回答を見てみると、日系人社会で嫌な思いをしたことがなく、日系人との係わり合いを強く持ちたいと思い、日系人社会が「戦争花嫁」に対して差別・偏見があるとは思ってなく、3人の親友のうち2人が日系人であと一人が「混血」と答え、「戦争花嫁」という言葉を別に恥ずかしいとは思ってなく、むしろ誇りに思っている、と答えている。

次に「戦争花嫁」がこれまでの生活の中で一世などから受けた言動のうち、差別と感じたものをいくつか列記してみよう。「日系一世の人に、あんたらの子供はハンパだ。日本人でもないしアメリカ人でもないからと言われた」（ロングビーチのAさん）⁴⁸⁾、「シアトルのある仏教会で一世の人達は絶対に会計に関することは私達、『戦争花嫁』にタッチさせてくれない」（シアトルのBさん）⁴⁹⁾、「悲しい思いをしたのは日系一世とのミーティングに主人と一緒に出た時です。集まった一世のおばあちゃんが陰でひそひそ話してるんですね。『可愛い顔してんのに、かわいそうに、クロちゃんのワイフなんかになって、』って」（ロングビーチのCさん）⁵⁰⁾、「一世や二世の人に軽蔑に満ちた言い方で『戦争花嫁』は『乗り合い馬車』だとよく言われた」（カリフォルニア州サリーナスのDさん）⁵¹⁾。最後の事例として、ある日本の新興宗教教団のサンディエゴ布教所の事例を井上（1985）の記述に沿って書いてみる⁵²⁾。某教団は1980年にサンディエゴに布教所を設立し、若い教師が奮闘していた。

彼の奥さんが白人ということもあって非日系人の信者獲得には熱心だったが、メキシコ人、黒人への布教は信者の反発も予想されてなかなか出来なかった。日本人の国際結婚者も布教対象になったが、「戦争花嫁」は含まれていなかった。「戦争花嫁」でない国際結婚者が、「戦争花嫁」と混同されるのを嫌うからだ、と井上は書いている。以上示した2つの調査結果と実際に差別されたと感じた発言や事例から、次の3つのことが総括と言える。

第1にあげられるものは、「戦争花嫁」が日系コミュニティから受けてきた差別・偏見は思われている以上に大きく、多くの「戦争花嫁」の心に傷を残している、ということである。『40周年記念』のアンケートに、日系コミュニティに対して「仲良く」「差別しないで」「偏見捨てて」といったコメントが多かったということは、そのことを如実に物語っている。1999年の筆者の調査で「日系社会での嫌な経験がありますか」の問について「はい」が22%と予想以上に少なかったが、これは次に述べる3つのことが理由として考えられる。1) 9名のオーストラリアからの回答者は「はい」と答えていないが、それは「戦争花嫁」が渡豪した頃はオーストラリアには日系コミュニティがなく、今も街の一角に日本町を建設するほど日本人・日系人はいないから、2) 全米に回答者が散らばっていて西海岸、中西部、及び東部の大都市とは異なり、日系のコミュニティが独立しては存在していない地方都市にはあまり日系人がいないから、3) 渡米後50年近く経ち、嫌な、苦しい体験も「思い出」として語ることができるようになり、「ちょっとした嫌な思い」はアンケート記入の時に忘れ去ってしまったため、という3点である。このうち1)と2)の理由は次に指摘するステレオタイプとの関連で捉える必要がある。1)の場合の「戦争花嫁」が移住した時代には日系コミュニティは存在してなかったオーストラリアや、2)の場合の西海岸の大都市やハワイにあるような日系コミュニティの存在しない地域では、人々が抱く「戦争花嫁」へのイメージが日系コミュニティでステレオタイプに基づいて捉えられていた「パンパン、夜の女、水商売の女」などといったイメージというよりはむしろ、ラフカディア・ハーンやルース・ベネディクト、ジェームズ・ミッチェナーらの描く日本像、日本人像、日本人女性像の影響を受けたイメージを抱いていたからである。ただ「性」に関連したイメージとしてはすでに述べたように一般的な売春婦やバーの女といったものよりも、ゲイシャのイメージを抱く人が多いことはよく指摘されている。

第2として総括できることは、「戦争花嫁」に対するステレオタイプが日系人と一般のアメリカ人では異なっていた、という点である。これは自分が移り住んだ国（アメリカ）で受けてきた偏見より日系コミュニティ内で差別・偏見を受けた、と答える人が多かったことから、この違いが調査結果に表れている。多くのアメリカ人が「戦争花嫁」に対して抱くステレオタイプと日系人が抱くそれと異なることからこうした違いが出て来ているのである。多くの一般のアメリカ人が抱く「戦争花嫁」へのステレオタイプは「戦争花嫁」への個別のステレオタイプではなく、映画『サヨナラ』で描かれたようなエキゾチックで性的魅力に溢れ、そして「従順、可憐で、壊れやすく、弱音を吐かず芯の強い女性」という日本女性一般に対するステレオタイプがそのままあてはめられる場合が多く、「戦争花嫁」だから偏見をもつということはあまりなかった。アメリカでは1950年代後半から1960年代前半にかけ観光旅行が人気を集めていたが、そうした折からの観光熱と戦争に勝ち占領軍として軍隊を派遣し、その国を支配していることから来る優越感が重なり合って日本や日本女性に対する関心が高まった。オペラでは『蝶々夫人』が相変わらずアメリカでは人気が高く、1950年2月18日のJACLの機関紙PCでも「蝶々さん、テレビに」と題した記事で、NBCテレビのオペラ番組で

の成功と占領期の日本での日米結婚について書いている。小説では『サヨナラ』、『皇太子の窓』⁵³⁾などがベストセラーになり、映画『サヨナラ』が大ヒットした。このような小説や映画が多くのアメリカ人にとっては恰好の旅行ガイドブックの役割を果たし、東洋の神秘への憧れを増幅した。これらの作品では純情、可憐で、「壊れやすく、庇護の必要な日本女性」を守ってあげたいという、優位にたった立場から見た女性像が描かれているのである⁵⁴⁾。

それに対し、バーで働く女性といったいわゆる水商売の女性や「夜の女」「闇の女」「パンパン」といった売春婦であったとする、日本でのステレオタイプがそのままストレートに日系コミュニティでは踏襲され、「昔、夜の商売みたいなことをやっていたんじゃないの?」ということが日系人同士の間では公然と言われてきた。アメリカ人の多くの人が抱くエキゾチックなステレオタイプを、日系一世は勿論のこと二世も一般のアメリカ人ほどは持たなかった。このようにして日系コミュニティでは「戦争花嫁」を「軽蔑すべき可哀相な女性」として自分との距離を置き、冷たく突き放してしまい、前述の某教団での反応のように「あの人達と混同されては困る」といった見方をしているのだ。

これまで述べてきたように、日系コミュニティとアメリカ社会での「戦争花嫁」へのイメージは異なっていて、その違いが偏見として表出されるか否か、或いは偏見として表出され、差別的な言動に結びつく頻度が多いか否かの分岐点となった。そして結果的に日系コミュニティの場合はそれが偏見に基づいた差別的な言動に結びつくことが多くなり、アメリカ社会は日系コミュニティほどそうではない、という調査結果の数字となって表れている。

第3の点として総括すると、日系アメリカ人は「戦争花嫁」を日系人以下の下位集団、周辺の集団として位置づけ、日系人集団から「戦争花嫁」集団を分離させた、という点である。日系コミュニティの排他性の本質を探っていくとそこには差別を生む日本の社会構造があり、下には下があるといった日本の封建制度の「士農工商」というカーストがそのまま日系社会にもあてはめられ、差別を生み出す要因となってきた。換言すれば日系コミュニティの古い家父長制を支えるタテの社会構造が上述の調査結果や事例に示された色々な差別・偏見を生み出してきたということである。こうした家父長制を支えるタテ社会の構造が「戦争花嫁」集団を最下位集団に位置づけ、「戦争花嫁」は戦前からアメリカに居住している日系人からも、「戦争花嫁」以外の新一世からも分離され、排斥されてきた。

日系コミュニティにおける文化サークルや退役軍人の妻などが集まる会合などで、「私は『戦争花嫁』ではありませんが、」という言葉を目にする事がこれまでも何度かあった。この言葉のニュアンスとしては、「戦争花嫁」の人達は経済的にも貧しかったあの戦後の混乱期の中で、アメリカ兵と結婚して大変苦勞をしてアメリカにやってきた人であるのに対して、自分が結婚してアメリカにやってきたのは、幸運にもそうした時代ではなかった、だからあの人達が体験してきたような苦勞はそれほど味わなかった、という善意のニュアンスでそのように発言することも一方にはある。しかし他方においては前述の某新興宗教教団の事例にあるように、劣等である、として他者を規定することで、自己の優位性を保とうとして、そういう発言をする人もいるのも事実である。これは日本や日系コミュニティのマスコミで報道され、それによって作られてきたステレオタイプが今日においても日系人や戦後にアメリカに渡った「新一世」にも受け継がれたことに起因している。「昔、水商売が何か訳のわからないことをしていて、進駐軍の兵隊にくっついてアメリカに来たが、あとで離

婚され、アメリカでもバーなんかで働いていたあの人達と私は違う」、と言ったり、「あんな連中なんか仲間に入れない」として除外する傾向が日系人にはあった。このようにして日系コミュニティにおける「戦争花嫁」集団は日系人集団から分離され、周辺的な位置に追いやられてきたのである。（以下、次号に続く）

註

- 28) 「占領地の女性、近寄れぬ日本娘、退屈がる『勝利の兵隊』達」『羅府新報』1996年1月5日、4頁。
- 29) 安富成良、『『戦争花嫁』と日系コミュニティ：ステレオタイプに基づく排斥から受容へ』（Ⅰ）、『嘉悦女子短期大学 研究論集』78号、2000年、189頁～190頁。
- 30) 安富成良、前掲書、179頁～180頁。
- 31) 安富成良、前掲書187頁～193頁及び江成常夫「花嫁のアメリカ：ドキュメント・太平洋を結ぶ愛」『アサヒグラフ』（朝日新聞社、1980年12月増刊号）、249-253頁。「戦争花嫁」の職業については同著の巻末の「年表・花嫁の軌跡」のうち「夫と出会った時の花嫁の職業」の項目から統計をとった。86名のうち有効回答が68名。最も多かった職業はウェイトレス13名、続いて店員10名、スナック・バーのホステス、事務員の各6名、看護婦5名、ハウスメイド、PXの各4名、キャッシャー、洋裁師の各3名、ダンサー、秘書の各2名、そしてホテルのメイド、タイピスト、給仕、電話交換手の各1名となっており、学生が5名いる。著者のインタビューで自由に答えてもらったため同じ職業を別な名前で答えた場合がある点は考慮に入れなければならない。尚、植木 武編『海を渡った花嫁たち—戦争花嫁のプロフィール—』、2000年ではハウスメイド、ウェイトレス、タイピストがトップ3になっている。同著38-39頁参照。
- 32) 新1世の代表的な考え著したものとして石戸谷滋『日本を棄てた日本人：カリフォルニアの新1世』草思社、1991年などがある。
- 33) Kitano, Harry H. L. 『アメリカの中の日本人：一世から三世までの生活と文化』（内崎以佐味訳）（東洋経済新報社、1974年）123頁。尚、（ ）内の語は筆者が補足した。
- 34) Kitano、同前書、7頁。
- 35) 山本剛郎『都市のコミュニティとエスニシティ：日系人コミュニティの発展と変容』ミネルヴァ書房、1997年、211-213頁及び218頁-220頁。尚、山本はエスニックの集合理論を「エスニック集団の経済的・空間的隔離が彼らの集団行動を起こし、かれらの凝集性を高めるとする考えである」と説明している。
- 36) Kitano、前掲書、153-154頁。
- 37) Nakano, Mei T 『日系アメリカ女性：三世代の100年』（サイマルアカデミー翻訳科訳）（サイマル出版会、1992年）、15頁。
- 38) アメリカに渡った仏教の場合を例にとると、一方においてアメリカ社会への適応に困難を感じていた初期の移民にとっては、仏教会は外圧から見を守る「避難所」であり、「緩衝装置（buffer）」の役割を果たす役割を持っていた、エスニシティ保持の場であった。他方、仏教会はアメリカ社会への適応、同化の表れとして礼拝形態、オルガン伴奏の奏楽及び賛仏歌の斉唱などにおいてキリスト教会のものを真似てアメリカ社会でも違和感なく、受け入れられるような方式を取り入れた。これらのバランスの上に立って出来上がったのが日本仏教とは異なる「アメリカ仏教」であり、「日本の伝統的な文化」ではなく「日系文化」として認められてきている。こうした日系コミュニティの両方向を同時に目指す特質については山本、前掲書、227-233頁、及びS. S. Fujita & D.J. O'Brien, *Japanese American Ethnicity*, University of Washington Press, 1991, pp.178-185参照。
- 39) 山本剛郎、前掲書、233頁。
- 40) Matsumoto, Valerie J., *Farming the Home Place: A Japanese American Community in California 1919-1982*, Cornell University Press, 1993, p.74
- 41) 新垣 誠、「沖縄の心（Uchinanchu Spirit）：ハワイにおける「ウチナンチュ」という主体性についての一考察」『移民研究年報』第4号、1998年3月、日本移民学会、26頁。
- 42) Kimura, Yukiko, "War Brides in Hawaii and Their In-Laws," *The Journal of Sociology*, LXIII (July 1957), p.71の

Table 2 参照。日系二世と結婚した日系「戦争花嫁」の義父母及び義兄弟・姉妹との人間関係の満足度については満足48%、普通35%、不満11%となっている。

- 43) ハワイの日系人は本土の日系人を「コトク」(頭が固く脳の中身がカラで頭をたたいても「コトン(ク)」と音がするだけ、ということ。鶴木眞『日系アメリカ人』、講談社現代新書、91頁。
- 44) 井上茉莉「ジープに乗せられた花嫁たち」『別冊週刊サンケイ』1959年9月1日、106-112頁参照。『羅府新報』1946年4月16日では郷田氏夫妻は高知県出身となっている。
- 45) 井上茉莉、前掲誌、107頁。
- 46) 1999年10月24日、カリフォルニア州トーランス市にて開催された第3回日系国際結婚親睦会世界大会にて調査。この日は「戦争花嫁」の夫にも調査票調査を実施した。
- 47) 1988年10月30日開催。1948年に米兵と結婚した日本女性が渡米許可が出てワシントン州にやって来て40周年ということで開催され、当日は全米から220名が集まった。
- 48) 1998年9月8日、ロングビーチにて面談。
- 49) 1998年9月11日、シアトルにて面談。
- 50) 江成常夫、「花嫁のアメリカ」『アサヒカメラ増刊』朝日新聞社、1980年、239頁。
- 51) Williams, Teresa K., "Marriage between Japanese Women and U.S. Servicemen since World War II," *Amerasia Journal* 17:1 (1991), p.154.
- 52) 井上順孝、『海を渡った日本宗教』、弘文社、1985年、149頁。
- 53) 小泉一郎訳、文芸春秋新社、1953年: Elizabeth G. Vining, 原題は *Windows for the Crown Prince* (New York: J.B. Lippincott, 1952)
- 54) Sheila, K. Johnson, 『アメリカ人の日本観』、サイマル出版会 (1986)、24頁。(鈴木健次訳)、10頁。

(参考文献) *注に記載されているものを除く

- 有賀夏紀、『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房、1988年
- Cott, Nancy, "Marriage and Women's Citizenship in the United States, 1830-1934." *American Historical Review* 103:5, December 1998, pp. 1440-1474.
- Houston, Velina Hasu, "Tea." In *Unbroken Thread*, ed. Roberta Uno, 155-200. Boston: University of Massachusetts Press, 1993.
- 伊藤一男、「座談会 あめりか花嫁の詩——シアトルの日本人女性と伊藤一男」『明治海外ニッポン人』PMC出版、1984年、付録1-7頁
- 河原崎やす子、「M. Butterflyとステレオタイプの錯綜」『英文学論考』立正大学英文学会第19号、1993年、41-55頁
- Kimura, Yukiko, "Religious Affiliation of War Brides in Hawaii and Their Marital Adjustment." *Social Process in Hawaii* 4:1, 1977.
- Lark, Regina F., "They Challenged Two Nations: Marriages between Japanese Women and American GIs, 1945 to the Present." Ph.D. diss., University of Southern California, 1999.
- Nakano, Mei T., *Japanese American Women Three Generations 1890-1990*, Mina Press and National Japanese Americans Historical Society, 1990.
- Nitta, Fumiteru, "Kokusai Kekkō: Trends in Intercultural Marriage in Japan," *International Journal of Intercultural Relations*, Vol.12 (1988), pp.205-232.
- Pascoe, Peggy, "Race, Gender, and Intercultural Relations: The Case of Interracial Marriage," *Frontiers: Journal of Women's Studies* XII (Number 1), 1991, pp.5-18.
- Saenz, Rogelio, Hwang, Sean-Shong and Aguirre, Benigno E., "In Search of Asian War Brides," *Demography*, Vol.31, No.3, August 1994.
- Shukert, Elfrieda Berthiaume, and Barbara Smith Scibetta, *War Brides of World War II*, Navato, CA., Presidio Press, 1988.

Tinker, John N., "Intermarriage and Ethnic Boundaries: The Japanese American Case," *Journal of Social Issues* 29, 1973, pp.49-65.

植木 武・新田文輝・鈴木一代、『海を渡った花嫁たち——戦争花嫁のプロフィール——』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究報告書 課題番号08041084、2000年

山本剛朗、「日系アメリカ人コミュニティの研究枠組みに関する一考察」『関西学院大学社会学部紀要』54、1987年、45－64頁

（平成13年11月1日受理）